

〔論文〕

子どもの叙式的描画表現における非図式的要素と画面認識

栗山 誠*

子どもの叙式的な描画表現には、形式的な図式や画面構成にとらわれない楽しさが含まれていると思われる。そこで本論では、叙式的な描画表現にみられる、非図式的なもの（線やあいまいな形態）についてと、画面認識について考察することを目的とした。方法としては、子どもの作品を分析し、定着図式の有無、基底線の有無、叙式的の有無により8つのパターンに分けてその傾向を調査した。結果から2つのことが考察された。まず叙式的表現のなかでは、非図式的な要素として「動きの線」の存在が共通してみられた。それは叙式的が無い時に現れる探索的触覚線と異なる性質で、身振りの延長としての表象的触覚線であると判断された。

もう一つは叙式的表現における画面空間の認識では、基底線を最初に設定するよりも画用紙を「基底面」として捉えることにより、表現の可能性が増大することが考察された。

和文キーワード：叙式的表現、子どもの描画、図式、基底線、画面の空間認識

I. はじめに～目的

これまで描画の発達研究では、大きく2つの観点から子どもの描画の発達の特徴の流れが示されることが多かった。1つの観点は、子どもが描く形態（図式）についての発達の特徴に注目したものである。代表的なところでいうと例えば、G.H. リュケ（1927）は、「偶然の写実性」→「出来損ないの写実性」→「知的写実性」→「視覚的写実性」といった発達の流れを示した¹⁾。一方、2つ目の観点として、子どもの画面空間に対する認識の発達の特徴をも含めた発達段階説も唱えられてきた。日本では特にアメリカのV. ローエンフェルド（1947）が提唱した発達段階説²⁾がよく知られている。それは、「なぐり描きの段階（感覚運動期）」→「pre-schematic stage（様式化前の段階）」→「schematic stage（様式化の段階）」→「写実主義の開始」→「擬似写実主義の段階」といった発達過程の流れである。特に幼児期から児童期にかけての描画研究では、V. ローエンフェルド説を参考に「感覚的運動期」→「前図式期」→「図式期」といった捉え方が一般的である³⁾。

さて、「前図式期」と「図式期」の特徴の大きな違いは、図式に関していうと、前者は再現の試みが始まる段階でまだ「形態象徴が絶えず変化している」時期をさす。そして子どもは「物の見方をまだ固定させていない」ので定着した図式化ができない段階である⁴⁾。画面空間の認識の相違の観点からいうと、前図式期は「物と物とを相互に関係づけることは考えず再現することだけに満足している」段階⁵⁾で、画面の上下左右という方向性も意識されていない。一方、図式期になると、自分なりの「図式」が完成され、図式的要素を1つの画面に配置する上で、その関係性を徐々に意識しはじめる。ここでは「基底線」

*大阪総合保育大学 児童保育学部

といわれる基準の線を画面に設定し、描かれた要素どうし関係をつないでいくのである。

以上述べたことは描画発達の一般的な流れであるが、実際の子どもの描画活動を観察していると、未だ図式が定着しない段階の子どもでも、線やあいまいな形態を画面上に次々に描きながら描画を楽しむ様子がうかがえる。また基底線のような基準線を描かずに物語的な描画を展開している子どもも多くいる。こうした描画を楽しむ描画表現の特徴としては、描きながらイメージを広げていくような叙述性、あるいは物語性を持っていることが挙げられる。この叙式的表現の中では図式や画面構成などの形式的な意識を超えた楽しみが含まれていると予測される。そこで本論の目的は、叙式的表現に見られる、図式や非図式的なもの（線やあいまいな形）について考察し、さらに、叙式的表現における画面認識について考察する。特に図式期の子どもが描画過程を楽しみながら表現をする上で、①図式の使用、②画面構成への意識、③物語性が、大きく関係すると思われるので、第2章ではまずこの3つの要素について発達の観点からその特徴と課題を整理する。そして、第3章で実際の子どもの描画を年齢別に調査し、上記の3要素がどのように影響し合っているのかを検討する。調査結果をもとに第4章では、子どもの叙式的描画表現における非図式的要素と画面認識について考察し、この時期の描画活動に見られる特徴的な意味を明らかにしたい。

II. 図式期の描画要素と課題

1. 形態概念（図式）の獲得の問題

幼児後半期になると、生活に必要な言葉をだいたい使えるようになり、紙面の上では自分の経験や思いを、図式を使って表現するようになる。図式とは、単純な形や線を組み合わせたり配列したりして、特定のある対象や状況を記号的に表わしたもので、形態概念あるいは様式のことをいう⁶⁾。子どもは経験から自分なりにこの形態概念(図式)を編み出し、それを繰り返し描く中で固定化し、図像として記憶の中に止めることになる。それは単に形だけの記憶ではなく、最終的には描く手順^{7) 8)}をふくめた記憶として残ることによっていつでもどこでも使える完成された個人的な図式となり得る。

子どもたちは、この形態概念を用いて想像したことや生活の中にあることなどを絵にしていくので、語彙が増えていくにしたがい、形態概念も増えていくことができれば、様々なことが表現できるということになる。

しかし実際には次々に生まれる様々な発想や自分の経験した3次元性の内容は、記憶にストックされている図式ではすべて対応できないことが予測される。ある子どもは既に持っている図式を当てはめながら変形させて新しい事態に対応する(図1)。ある子どもは新たな描き方に挑戦する姿もある⁹⁾。しかし中にはイメージどおりに描けずに「失敗」という言葉を口にする子どももいる。自分の意図したことと画面に描かれたことの類似によって子どもの心理的満足は得られるが、もし意図したことと似ていない場合、子どもは次のような言動を行なうことがある。

こじつけて言い訳をする、新たな解釈をする、‘へんてこな’かたちを楽しむ、修正する、消す、横に新たに描くなどである。

言葉での認識と実際の描くこととは別の問題である。「どうやって描いたらいいのかわ

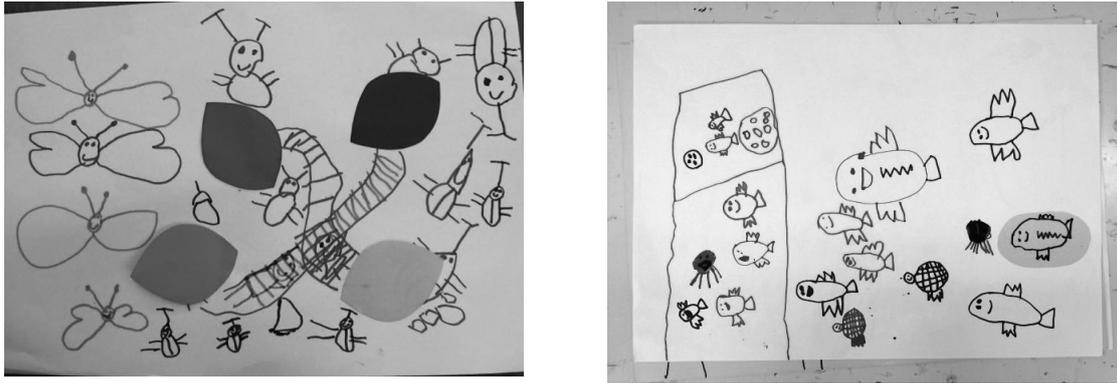


図1 これまで描いてきた人物の描き方を虫（左図）や魚（右図）に適応させている。

からない」というこの時期の子どもの発言は、描きたい内容や知識はあるのだが、それをすぐに形態概念として表わすことの難しさを物語っている。

形態概念の問題については、V.Lowenfeld (1947) が、「子どもは人と環境との豊富な概念を持って様式把握の段階へと到達することもあるが、貧弱な様式を持って概念を構成することもある」¹⁰⁾「この概念が豊富になればなるほど、表現はしやすくなる。」¹¹⁾と述べている。つまり、形態概念の豊富さが、イメージを表現する描画活動の意欲に関わってくるというのである。躊躇う子どもは、形態概念の獲得が未だ少なく、人と比べて自信をなくしたり、大人の期待に応えることができず、プレッシャーに感じるようになるということが考えられる。栗山誠 (2008) は、幼児期の子どもたちは既に描ける形を反復すると同時に、ふさわしい環境があれば、さらに新しい形態に常に挑戦する瞬間があるという。この挑戦の場をどのように提供するかが課題となる。例えば、友達と共同で絵を描く時間や、大人からの適切な援助や環境があるとき、また遊びとして絵を捉えているとき、子どもたちは今ある形態をさらに豊富にしていくと指摘している¹²⁾。

2. 画面空間の認識の変化

画面構成の面では発達的にどのような変化があるのだろうか。図式的表現期の子どもは、画面の空間認識が発達し、画面上に描かれるものどうしの関連や部分と全体の関連、バランスなどを徐々に意識し始めるようになる^{13) 14) 15)}。図式的表現をする時期のうちでも初期においては、子どもは、画面の上下の方向に関係なく形態を描き込むことがあるが、それはまずは物の基本構造 (= 図式) を描くことに精一杯の時期だからである。やがて「基底線」という舞台装置を作ることにより、画面の上下の関係、形態の大小、並べ方などの関係を構成する拠り所を意識し、絵は構造を持ち始める。ただしこの基底線は単に地面のラインとしてではなく、ある時にはテーブルの縁、ある時には画用紙の縁となるように、子どもにとっては自分の身体がそこにいるという場所¹⁶⁾であり、運動感覚的経験に起源をもつ¹⁷⁾といわれる。

また同時に画面全体を意識することにより空間的な制約についても意識し始める。そうすると画面を構成する上である程度の計画、メドをたてる力が必要となってくる。内田 (1989) は、子どもの物語の創造について述べる中で、時間的展望と自己の認知との関係に触れ、5歳後半になって時間的展望が未来を含むようになり、未来の視点から現在を見て、自己の行動についての予測や見通しを立てるプランニングを行なうことができるよう

になるという¹⁸⁾。このことは描画の画面構成の過程で、全体を見通しながら現在のことを描くプランニングの力が徐々にみられるようになることと時期が重なる。以上のように今までの思いついた物から順番に自由に描くという関わり方にはなかった、描画の能力が徐々にみられるようになる。

3. 叙述的思考の発達と物語性

表象活動が活発になる年齢期（一般に5、6歳時期）の子どもたちの描画活動では、描きたい事をあらかじめ思い浮かべて、表象・概念を計画的に描くだけでなく、描いている文脈の中でさらに次々にイメージが湧き絵を描き続ける姿が多く見られる。まるで話をするように画面上にどんどん絵を描いていくので、こうした描画活動の特徴から、子どもは「描きながらお話をする」「描く中でイメージを広げる」と言われることもある。この文脈の中で描いている幼児は、進行する会話のように結果を意識せず、「その時、その場」を楽しむという瞬時的な充実感があるため、生き生きとその活動に没頭している。たとえ普段、一斉保育の中で、見た（観た）り体験したりして描くことにためらう幼児も、空想の中で物語的に展開していける描画や、保育者と対話をしながら描くもの、遊びのなかで描くものは、自由に想像をふくらませることができるので楽しみながら継続して描くのである。このような叙述的表現の特徴としては、画面に登場するものの一連の時間の流れや動きを語りながら表わすので、物語的な要素が存在すると思われる。

4. 課題の整理

以上、図式的表現期の子どもの特徴について述べてきた。この時期の課題について整理すると、図式の獲得の問題については、言葉の発達にしたがい手が追いつかないという、技術的な問題が存在することが分かった。しかし筆者の保育実戦の中では、形態概念が少ないとみられる子どもであっても、他人から認識できない線や、曖昧な形態を使用しながら描画を展開している子どもも多くみられた。年少児では特にまだ形態概念が定着していないにもかかわらず、単純な円や線を画面いっぱい描くことを楽しむのである。つまりその子どもは自分なりの線や形を駆使して叙述的に物語を展開させているのである。時には人形で遊んでいるときにセリフや身振りを入れることもある。そうした描画の楽しみ方が存在するのである。

また画面空間の認識の変化に伴う計画的な画面構成の仕方と、叙述的思考にともなう‘無計画’な描画（描きながらイメージを広げていく）方法の特性を見てきたが、一見矛盾するこの2つの関連は、発達に伴いどのように意味を持つのだろうか。また、図式はこの2つとどのような関連があるのだろうか。次章で実際の子どもの絵を分析しながら考察したい。

Ⅲ. 実証的研究

1. 研究方法

(1) 設定： 子どもによっては、描画に積極的な幼児もあるが消極的な場合もある。このような幼児全てに画面に関わってもらうため、素材に関わるきっかけからイメー

ジが自由に広がる描画を一斉保育の中で設定した。具体的には、マスキングテープを画面に自由に貼るところからきっかけを作り、パスで自由に絵を描くという保育である。マスキングテープを貼るという設定の理由は、年少児でも簡単にハサミや指の力で長さを調整しながら切ることができるということ、貼ったものが線状（棒状）になるため、「道」のように線として見立てたり、空間を囲って「家」や「プール」など身近にあるものが簡単に組み合わせで作れたりすることができるからである。また、マスキングテープは子どもにとっては非日常的なものなので、その素材の目新しさから活動自体に興味を湧くと思われた。さらに子ども達はシールのような糊を使わずに画面に次々に貼ることができる素材を好むのでこの素材を選んだ。マスキングテープの色や模様は子どもの表現に影響を与えると思われるが、今回は模様が無いものを使用し、色については子どもに選択させた。

- (2) 対象： H幼稚園の年少児（おおむね3歳）51名、年中児（おおむね4歳）69名、年長児（おおむね5歳）49名が1つのテーマのもと、描いた作品。
- (3) 分析方法：前章で考察した、描画を楽しむための条件的要素を参考に「図式の定着」「画面認識（基底線）」「叙述性」がどのように作品に表れているのか、各作品を分析した。つまり作品ごとに、下記のカテゴリー独自の記号を付け、パターンに分けた。その際、下記(4)の分析条件をみたすものをカウントした。そして全体から、それぞれのパターンの割合を算出し、年齢ごとの傾向を探った。

定着図式 有り① 無し②	基底線（上下、配置の基準線） 有り a 無し b	叙述性 有り ア 無し イ
-----------------	--------------------------------	------------------

例えば、定着図式を使用し、叙述性はみられるが、基底線らしきものが存在しない作品は、「①bア」パターンの作品とみなす、という具合である。

(4) 分析の条件

【定着図式の有無について】

- ・ 単独の円と線の組み合わせで、人物、家など簡単なものを表わしている。
- ・ 頭足人、太陽も図式として含める。
- ・ 人物画は、胴体がなく顔だけを描いていても、その時期の発達の特性として人物全体を表わすとみられるので、図式とする。

【基底線の有無について】

- ・ 画面上に水平方向に描かれた線を舞台とし、そこに描かれる各種内容が関連付けられている場合、それは画面を意識した基底線としてみなす。
- ・ 紙面の下辺や描かれたテーブルの周辺などに各種内容が関連付けられている場合も、その辺を基底線としてみなす。
- ・ 地面がなくても、空を描く、上部から雨が降る、などの構図は、紙面の上下関係を把握しているので基底線が存在するとみなす。

【叙述性の有無】

- ・図式が存在しなくても、線の動きや図式らしき曖昧な形態を2つ以上描き、その相関が読み取れる場合、そこにイメージの連鎖=語りがあったと思われるので、叙述性があるとみなす。
- ・時間の流れが読み取れるものは叙述性があるとみなす。例えば矢印を描いて動きを記号的に表示するもの、図式を変形させて手足の長さを変えたり方向性を示唆していることが読み取れるもの、描画過程で身振りや保育者との対話が確認できたものなどである。

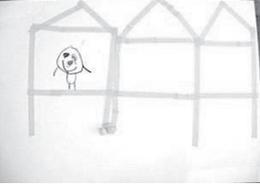
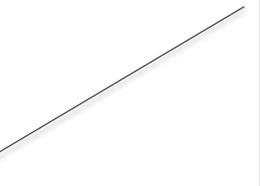
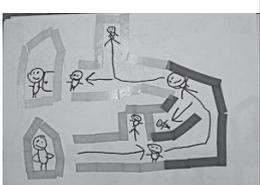
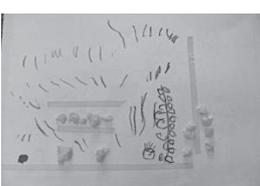
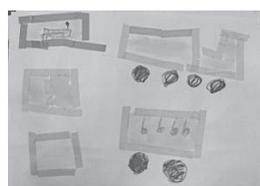
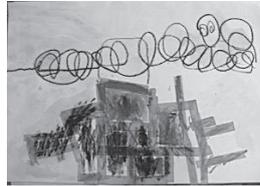
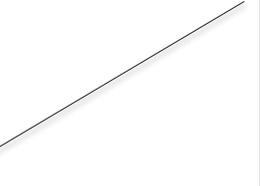
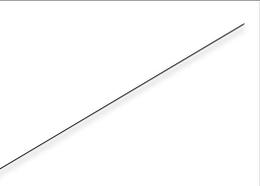
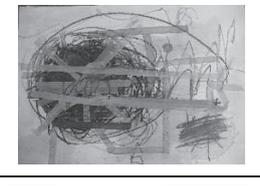
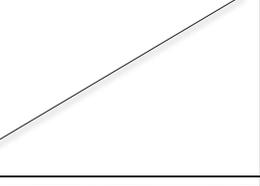
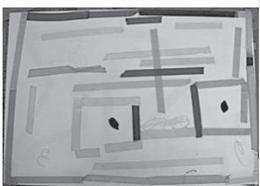
2. 結果

表1 年齢別の定着図式・基底線のパターンの割合

()内は実数

パタン	年少		年中		年長	
	割合	実数	割合	実数	割合	実数
①a	29% (15)	ア(14)	46% (32)	ア(23)	65%(32)	ア(32)
		イ(1)		イ(9)		イ(0)
①b	18% (9)	ア(4)	21% (15)	ア(9)	30%(15)	ア(10)
		イ(5)		イ(6)		イ(5)
②a	6% (3)	ア(1)	4% (3)	ア(1)	0%(0)	ア(0)
		イ(2)		イ(2)		イ(0)
②b	47% (24)	ア(3)	28% (19)	ア(2)	4%(2)	ア(0)
		イ(21)		イ(17)		イ(2)
合計	(51)	ア 43%(22)	(69)	ア 50%(35)	(49)	ア 86%(42)
		イ 57%(29)		イ 49%(34)		イ 14%(7)

表2 各年齢、パターンの代表作品

パターン	年少	年中	年長
①a	ア 	ア 	ア 
	イ 	イ 	イ 
①b	ア 	ア 	ア 
	イ 	イ 	イ 
②a	ア 	ア 	ア 
	イ 	イ 	イ 
②b	ア 	ア 	ア 
	イ 	イ 	イ 

(1) 全体の傾向

年齢（年少・年中・年長）別に、定着図式の有無、基底線や要素の関連の有無が、どのような割合（％）で現れるかを示したものが表1である。それぞれのパターンの内容を具体的に示すと、① a = 定着図式有り・基底線あり、① b = 定着図式有り・基底線無し、② a = 定着図式無し・基底線あり、② b = 定着図式無し・基底線無しである。それぞれのパターンのうち、さらに叙述性が有るか（ア）、無しか（イ）で調べたものを、各年齢枠の右側に示した。合計欄には、ア（＝叙述性有り）とイ（＝叙述性無し）の年齢別の割合を示した。そして、説明を分かりやすくするため、それぞれのパターンの代表的な作品を一覧にしたものが表2である。

表1から分かることは、定着図式に関しては、加齢とともに増加の傾向がみられた。逆に図式を使用しない感覚的描画は、加齢とともに減少の傾向がみられた。

基底線（上下、配置の基準線）は、図式を使用する幼児は加齢とともに使用が増加したが、図式を使用しない幼児については、基底線は逆に減少する傾向にある。このことから、年長になると図式を描かない幼児は、感覚的な行為に特化して描画を楽しむと思われる。

叙述性は、加齢とともに増加の傾向があった。特に年長になると86％に叙事的な描写がみられた。年少・年中はどちらも約半数に叙事的表現がみられた。

以上の結果から、一般に、これまでの描画研究のなかで説明されてきたことが数値で実証されたといえよう。

(2) 叙事的表現の傾向

さて、今回の調査では図式表現をしない幼児あるいは、図式がまだ定着していない時期の幼児も、叙事的表現を行なっていることが確認された（②ア）。また、基底線で画面空間を関連づけることをしない幼児も、叙事的表現が展開されていることも分かった（bア）。それは表3のような割合であった。

表3 定着図式・基底線無し－叙述性有りのパターンの傾向

() 内は実数と年齢別全体数

パターン	年少	年中	年長
②ア（定着図式無－叙述性有）	8% (4/51)	4% (3/69)	0% (0/49)
bア（基底線無－叙述性有）	14% (7/51)	16% (11/69)	20% (10/49)

表3から分かることは、【②ア】パターンの定着図式無しで、叙述性が有るものは、年少が一番多く、次に年中で、年長は0％であった。つまり、年少、年中は定まった形や線ではなく、あいまいな形態等を使用しながら、線の動きなどで物語性を持たせたものが多少ともなり含まれていたということになる。そして年長は、叙事的な表現を行なう場合は、図式を操作、工夫することにより物語性を表していることが予測される。

しかし、考察のところで説明するが、1つの作品に注目すると、叙事的表現では、年長であっても、全て図式によって画面を埋めているのではなく、図式に紛れて、動きのような線や感覚的な線が存在することも見逃してはならない。例えば表2の【① aア】パターンの年少、年中、年長それぞれの作品は、図式による物語性が読み取れるが、一見、意味

の不明な線やあいまいな形も含まれている。

【bア】パターンの基底線で画面を関連づけしない構図で、叙述性があるものは、加齢とともに少しずつ増加の傾向にある。一般に年長になるにつれ、基底線を基準に描画表現を行なうとされているが、基底線を持たない場合でも、画面空間を自由に使い、叙述的な表現を楽しむことが分かった。

3. 考察

本論では、図式的表現期の子どもの描画表現について、①図式の使用、②画面構成、③叙述性を手がかりに発達的な視点から調査を行った。ここから、調査から得られたデータをもとに、叙述的描画表現における非図式的要素と画面認識について考察する。

(1) 叙述性と動きの線

年長になるにつれ、叙述性が出てくることが多いことが確認されたが、図式が定着する前の描画においても、叙述性は存在するということが分かった(表2の②ab)。例えば表2から【②aア】のパターンの年少代表作品をみると、形態図式はまだ定着していないが、空間を四角型に区切り、その内側と外側に異なる内容と思われるものを描いている。それぞれの不定形な形には2つの眼があるようなので、何か生き物の可能性がある。また四角の内側には、入れ込む要素が多いことを見ると、明らかにここには何か物語が発生していることがうかがえる。そしてこの画面の左右には動きの線のようなものが見られることから、時間の経過を示す物語性が読み取れる。同じパターンの年中作品を見てみよう。これは描画過程を保育者が記録していたものだが、この幼児は画用紙底辺を下方と位置づけ、マスキングテープでビルのようなものを構築し、「火事」と言って、ビルの中を赤色と黄色で塗り込んだ。その後、黒色のパスで重ねるようにして塗り込んだ。これは「火を消している」と本人が発言した。そして上部に水か煙か不明であるが、うごめく線を描いた。

次に、【②bア】のパターンは形態概念が出現せず、画面構成の手がかりである基底線も見られなかったが、叙述性があると判断したものである。まず年少作品の方は、マスキングテープで画面を埋め尽くし、その後、左下から順に、テープの隙間に頭足人のような形態や動く線が重なるように描かれている。頭足人らしきものは、他の線と混じり安定図式とは言えないが、隙間を上部に向かってに動いているようである。次に、【②bア】年中作品の方は、マスキングテープで空間を仕切った後、黄緑色と紫色で画面全体にギザギザの線をテンポよく描いた。保育者の記録によると、それは何かが跳ねているような身振り重なっているということであった。その後、黒色で中央左の箇所を塗り込みはじめ、だんだん力がこもっているようであった。そして「絆創膏」と言いながら、塗りつぶした黒色の上にマスキングテープを貼った。以上のことから、作品からは意味が読み取れないものでも、描画過程の記録から、そこに物語性が存在していたことが予測される。

さて、以上のように、叙述性のあるものに共通して見えたことは、「動きの線」の存在である。図式が存在しない描画については上記で述べてきたが、【①aア】パターン、【①bア】パターンのような、図式を使用した描画においても、叙述性がある場合、「動きの線」が同時に表れていることが注目に値する。たとえば、【①aア】パターンの年長の代表作品を見てみよう。この描画はほとんどの意味形態は図式であらわされているが、一部、サッ

カーボールの箇所を注意してみると、ボールが動く線を記号的に表していることがわかる。またボールが2つ描かれているところを見ると、この2つのボールは同一のもので、時間の経過を表している可能性がある。次に【①bア】パターンの年少、年中、年長の代表作品をみると、それぞれ、図式的な人物画が描かれているが、その中に図式以外の線も多く存在することが見てとれる。それぞれの線は、この作品結果のみを見ると混沌として分かりにくい、おそらく描画過程では意味のある線（動きの線）である可能性がある。年長になるとその動きの線による動きは、記号的な矢印で表される場合もある。【①aア】パターン、【①bア】パターンの比較からいえることは、基底線のような画面配置の基準線が描かれていないほうが、叙述的表現においては動きの線が整理されず、混沌としていると思われる。

ここまで見たところでは、子どもの描画では、図式を使用する、しないに関わらず、叙述的性格がある描画では、「動きの線」が現れる可能性があることが明らかになった。

(2) 2つの触覚的な線

前項で、【②aア】と【②bア】において、形態図式を描くことをせず、叙述性をもつパターンをみてきた。安定した形態図式や、基底線のような画面基準が無くても、描画過程に注目すると、不安定な形や線によって物語性が表現されて、そこには「動きの線」が存在することが確認できた。その動きの線は、語りの中で感情と共に現れる強弱や、スピード感がともなう線であるといえる。つまり、普段、描画場面以外では、語りとともに身振りとして表れるような身体の動きと似ていると思われる。そうした感情を伴う身体的な動きが、画面上に表れているのではないだろうか。

それでは同じく形態図式が出てこない描画で、叙述性無しとみなした【②aイ】パターン、【②bイ】パターンをみてみよう。まず表2の【②aイ】年少の代表作品に描かれた線を見ると、こちらは動きの線という印象は薄い。何か形のようなものを構成しようとしているが、はじめて描くような緊張感が感じられる線になっている。【②bイ】年少の作品も、画面上をパスの線で歩くような自由な線が描かれている。鬼丸吉弘(1981)は、何かを構成しようとする時期の線を、表出段階(感覚運動期の段階)の線描と区別し、ある方向に向かって運動を示すから「方向線」であるといい、また未知の空間を探るはたらきをするから「触知線」と説明している⁶⁾。そうした観点からいうと、叙述性が無いこれらの作品に描かれた線は、画面を触りながら探索するような緊張感のある線で、「方向線」と「触知線」の性格を持った触覚的な線であるといえる。

以上の考察から、定着した図式がまだ現れない描画作品では、2種類の触覚的な線が存在する可能性がある。つまり、1つは感情をともなう身振りが視覚化されたような線で、それは何か意味をもつ動きのある「身振りの触覚線」である。もう1つは画面を触るように探索する線で、意味は持たないが方向性のみ持つ「探索的触覚線」である。それはどういった場合に違いが現れるかというと、叙述性がある時に、線は何かの動きを表したり、何かの存在そのものを意味したりする可能性があるので身振りの触覚線になると思われる。一方、叙述性が無い時、自由にうごめく線は、画面上を徘徊するような感覚的な線や形になるので、探索的触覚線であるといえる。

(3) 叙述性と画面構成

図式的な表現がなされている場合、画面構成に関してのパターンとしては、基底線が存在する作品【①a】と存在しない作品【①b】がみられた。第2章で見てきたように、基底線が存在しないということは、一般には、画面の上下の関係、形態どうしの意味関係を意識していないということである。特にV. ローエンフェルドのいう pre-schematic stage(様式化前の段階)では、物と物とを相互に関係づけることは考えず再現することだけに満足している段階であるといえる。表2の【①b】パターンの作品群はまさに、描かれた内容は画面空間上の配置がばらばらで、基底線のような基準舞台の上に乗っていないことが見てとれる。こうした画面構成の仕方は「ばらまき画」とか「カタログ画」と言われることもある²⁰⁾。

しかし、今回の調査で基底線が無い作品【①b】でも叙述性が存在する場合があることが明らかになった。つまり叙述性があるということは、物語的な意味の関係性が含まれるということである。配置はバラバラに見えても、意味のまとまりは考えられて描かれていることになる。これはどのように説明されるのだろうか。

清原知二(1995)は基底線に対して、「基底面」という概念を持ち出して子どもの絵に特有な構図について説明している²¹⁾。図2のように、「基底線表現では視点は手前正面部にあり、基底線を含んだ垂直の平面上に要素を配置していると考えられる。基底線が線であり基準であることは、要素を表現する位置は基底線上の左右にしか可能性がないことになり、要素の関係の説明が一次元的な左右の関係に限定されることになる。また直接基底線上にない要素も基底線上に立てられた平面上を上下に移動するだけであり、結局要素の位置関係は相対的な左右上下の関係でしか示せない」。この説明から、基底線を使用した構図というのは、画用紙という二次元空間に、上下左右の配置関係をあらわすことに特化

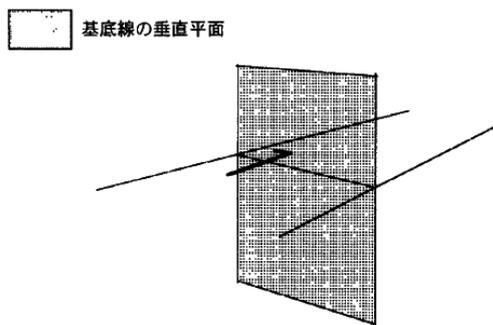


図2 基底線表現の視点/清原知二

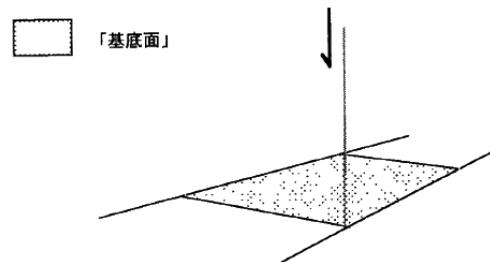


図3 基底面表現の視点/清原知二

して便利である。しかし表現は垂直線上に限定されるから平面向きを描く場所は存在しないといえる。そこで、図3のように視点を正面から天井部に移動させると、平面上の位置関係を俯瞰でき、平面向きの特徴があるものの表現が可能な視点が確保される。清原はここに現れる基準となる平面を「基底面」とし、描かれる要素の空間内の位置関係を意識する場合に現れるという。「基底面は描画平面上での空間認識を表現するために用いられる平面」で、「それはものどうしの位置関係をあらわすために用いられる一定の意味を持った配置のための下地である」²²⁾という。そうした観点から、表2の【①bア】パターン

のそれぞれの代表作品を見ると、視点がバラバラの印象を受ける描画であっても、描かれた要素を配置している平面＝基底面に注目してみると、人物や道、池のような塗り込みなどは、平面内での位置関係としては明確であるといえる。

しかし、子どもの描画作品を見ていると、上記のように、あるものは基底線を基準にして上下左右の配置関係から画面構想をし、別のものは基底面を基準にして平面内の位置関係をあらわしている、という単純な構造ではない。つまり、その2つの舞台装置が同時に現れるものもあるのである。例えば表2の【①bア】パターンの年長作品では、描かれた要素が、基底面を基準として平面内の移動や位置の関係を表していると同時に、左に描いている人物は家の中に入っているが、これはおそらく画用紙底辺部を基底線とした基準軸上の配置である。このように、2つの視点あるいはそれ以上の視点（多視点）から子どもの描画はなされていることが多い。清原はこの問題について、子どもは「場あるいは状況の設定を全ての表現の前に行なう必要があると判断する」といい、それは「基底面」という設定、平面の形をとる場合が多いという。基底面を設定することは「表現全てを包含する受け皿のようなものを先に想定することになる。これはそれぞれの要素の描画平面上での空間認識に基づく位置関係と平面向きの特徴を持つものを表現する必要性を満たすため」であるという。

叙述性のある表現は、描きながらイメージを膨らませ、次々に描いていく特徴を持つ。そうすると、基底線を最初に設定してしまうと、その後の描画が限定されるだろう。しかし、最初の画面意識として、画用紙を「基底面」として捉えたとき、描かれる要素は平面の中のどこにでも移動が可能になることから表現の可能性が増大するといえる。

今回の調査の場合、基底線無し【①b】【②b】の絵では、どの時点で、画用紙を単なる平面ではなく、物語が進行する基底面として捉えたのかは、叙述に従って描かれた間であると説明できる。しかし実際には、描画過程を時系列に詳細に分析しない限り、この部分が基底面であると断言することは難しいといえる。

IV. まとめと課題

本研究では、図式的表現期の子どもの描画活動を大きく規定すると思われる、図式獲得の問題・画面の空間認識・物語性を分析の視点とし、子どもの叙述的な描画表現における、非図式的な要素と画面構成について考察した。分析では、年齢別に定着図式の有無、基底線の有無、叙述性の有無が、どのように現れるかを8つのパターンに分けてそれぞれの特徴を確認した。

結果を見ながらの考察として、大きく2つのことが明らかになった。1つは、叙述的表現に見られる非図式的なもの（線やあいまいな形）についての考察である。年長になるにつれて、図式を使用し叙述性のある描画が多く見られるようになるが、一方で安定した図式が無くても、叙述性が存在する作品がどの年齢にもみられた。それらの作品に共通してみられたのは非図式的なもの＝「動きの線」の存在である。動きの線は、語りの中で感情とともに表れ、身体的な動きが画面上に痕跡として残されたものである。そういう意味では、この線は何かの動きを表したり、何かの存在そのものを意味したりするので表象的な線といえる。本論ではこれを身振りの触覚線と呼んだ。一方で、叙述性が存在しない作品

にも非図式的な線がみられたが、それは画面を触りながら探索するような感覚的な線であるので、探索的触覚線ということができた。

2つ目の考察としては、叙述的表現における画面空間認識の問題である。叙述性のある表現は、描きながらイメージを膨らませ、次々に画面に描いていく特徴を持つが、そうになると、基底線を最初に設定してしまうと、その後の描画内容の配置に限界がやってくる。そこで叙述的な描画では、描画開始時の画面意識として、画用紙を「基底面」としてとらえることにより、表現の可能性が増大することが考察された。

最後に本研究の課題を述べておく。本研究ではマスキングテープを貼ることをきっかけに表現された子どもの描画を対象とした。マスキングテープによる直線、あるいはそれで囲まれた空間は、描画材で描く線や空間と同等のように見える。しかし、画面に関わる行為の過程を観ると、マスキングテープは画面に貼ることにより、自動的、瞬時に直線を表すことができるが、描画材を使用した場合、描くスピード、強弱、リズムなどを感じながら線をひくことができる。その線をひくわずかな時間の中で、感情が湧き起こり、曲線、点線のような、より自己の心情に沿った線の表し方が可能なることもある。そうした意味で、今回のマスキングテープの線は、子どもの表現する線そのものと捉えるには課題が残る。今後は、子どもの線描だけによる表現の研究も行う必要を感じている。

文献

- 1) G.H.Luquet, 須賀哲夫監訳『子どもの絵—児童画研究の源流』金子書房, 1979
*ただし、原著は1927年に出版された。1913年にLuquetは『ある幼児の絵』も出版している。
- 2) Viktor Lowenfeld, 竹内清・堀之内敏・武井勝雄訳『美術による人間形成』1995, 黎明書房 *原著の初版は1947年出版である。
- 3) 藤江充は、『子どもの絵の謎を解く』明治図書, 2013, の中で、「前図式期／1～3歳」「図式期/3～9歳」「脱図式期(9歳～)」と区分けしている。
- 4) Viktor Lowenfeld, 前掲書, P.156
- 5) Viktor Lowenfeld, 前掲書, P.161
- 6) Viktor Lowenfeld, 著竹内清, 武井勝雄, 堀之内敏訳『美術による人間形成』黎明書房, 1947, では、schemaを「様式」と訳している。この言葉は「形態概念」という言葉に置き換えられて訳されている箇所もある。
- 7) J.Goodnow, 須賀哲夫訳『子どもの絵の世界—なぜあのように描くのか—』サイエンス社, 1979, p.21
- 8) 山形恭子『初期描画発達における表象活動の研究』風間書房, 2000, p75
- 9) 栗山誠「前図式期から図式期における幼児の形態概念模索の過程」『美術教育学』第29号, 2008, pp.207-217
- 10) Viktor Lowenfeld, 前掲書 P181
- 11) Viktor Lowenfeld, 前掲書 P187
- 12) 栗山誠, 前掲書, 2008, p208
- 13) Viktor Lowenfeld, 前掲書 P188
- 14) Maureen V.Cox, 子安増生訳『子どもの絵と心の発達』有斐閣選書, 1999, p.165
- 15) Nancy R.Smith, 上野浩道訳『子どもの絵の美学』勁草書房, 1996, p97
- 16) 安斎千鶴子『子どもの絵はなぜ面白いのか』講談社, 1986, p93

- 17) Viktor Lowenfeld, 前掲3), P191
- 18) 内田伸子『子どもの文章』東京大学出版会, 1989, pp.85-91
- 6) 鬼丸吉弘, 前掲書, pp.36-37
- 20) 藤江充, 前掲書, 2013, p9
- 21) 清原知二「基底面の存在について」『美術教育学』第16号, 1995, pp.129-139
- 22) 清原知二, 前掲所, 1995, p134

Non-schematic Elements and Drawing-Surface Perception in Children's Descriptive Drawing Expressions

Makoto.KURIYAMA

Osaka University of Comprehensive Children Education

abstract

Forms of enjoyment not influenced by formal consciousness, for example, schema and drawing-surface configuration, are believed to be reflected in descriptive expressions in children's drawings. Therefore, in this study, we examined non-schematic items (lines and ambiguous forms) and drawing-surface perception, which are seen in descriptive drawing expressions. The methodology involved analyzing drawings created by children in the study and dividing them into eight patterns based on the presence of fixed schema, base lines, and narrativity. On investigating the tendencies, two observations emerged. First, as a non-schematic element, the existence of "lines of movement" was commonly observed in the descriptive expressions. Their properties are judged to be different from those of exploratory tactile lines, which appear when there is no narrativity and are representational tactile lines as an extension of gestures. Second, it was suggested that in the drawing-surface space perception in descriptive expressions, the possible range of expressions increases when drawing paper itself is used as the basal surface, rather than when the base lines are set at the beginning.

Key words : descriptive expression, children's drawings, schema, base line, drawing-surface space perception